

令和7年度 病虫害防除情報

令和7年4月30日

発表：福島県病虫害防除所

**5月にまとまった降雨があるとモモせん孔細菌病感染拡大のおそれがあります。
春型枝病斑の徹底したせん除とともに、薬剤防除を徹底しましょう！！**

- 1 対象作物：モモ
- 2 病虫害：モモせん孔細菌病
- 3 対象地域：全域

発生状況等

- (1) 4月下旬の巡回調査において「あかつき」での春型枝病斑の発生は確認されませんでした。が(図1)、参考調査ほ場の「ゆうぞら」では発生が確認されています。
- (2) 向こう1か月の天候予報(仙台管区气象台4月24日発表)によると、東北太平洋側で降水量は多い確率が30%、平年並の確率が40%と予想されています。5月にまとまった降雨がある場合、感染が急拡大する可能性があるので注意が必要です。

防除対策

(1) 耕種的な対策

- ・ 春型枝病斑は新梢葉や果実への伝染源となるため、ほ場内をよく観察し、疑わしい枝も含め徹底してせん除しましょう(図2)。
- ・ 枝病斑からの病原細菌の漏出は、9月上旬頃までの長期間にわたるため、早期せん除が重要です(令和4年度農業総合センター参考となる成果)。
- ・ 枝病斑は7月頃まで長期間発生するため、定期的に複数回せん除しましょう。
- ・ 樹冠上部の枝病斑の取り残しは被害拡大につながるため、樹冠上部の発生を見逃さないようにしましょう(図3)。
- ・ 枝病斑をせん除する場合は、発病部位が残らないように病斑部の周辺を含めて可能な限り基部まで切り戻しましょう(図4)。
- ・ せん除した枝病斑は、園外に持ち出すなど適切に処分してください。

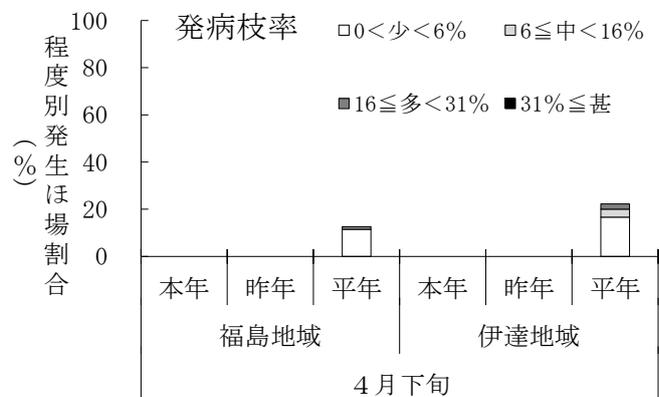


図1 春型枝病斑の発生状況(4月下旬、福島地域、伊達地域いずれも9園地「あかつき」)

(2) 薬剤による防除

- ・ 薬剤は、落花期から7月まで約10日ごとに散布してください。使用薬剤は、使用濃度、収穫前日数に十分注意し、同一薬剤の連用は避けてください。
- ・ 昨年度、酸化亜鉛水和剤(ICジンク水和剤 1,000倍)を組み入れた防除体系によってモモせん孔細菌病の被害を軽減できることが明らかとなりましたので、落花10日後頃に散布しましょう(令和6年度農業総合センター普及に移す成果、<http://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/680183.pdf>)。
- ・ なお、銅水和剤(クプロシールド)を使用する際は、薬害の発生を軽減するため、炭酸カルシウム水和剤(クレフノン 100倍)を、必ず一次希釈を十分に行ってから加用してください。また、沈殿しないように攪拌しながら散布を行ってください。なお、散布時及び散布後の高温等で薬害を生じることがあるので注意してください。

春型枝病斑を確実にせん除しましょう！

園地を何度も見回り、枝病斑を見つけしだい、早急に除去しましょう。



図2 春型枝病斑の発生（新梢葉の生育不良と枝の変色、令和6年4月11日撮影）



図3 春型枝病斑が樹冠上部に発生した場合の発病状況（写真提供：農業総合センター果樹研究所）

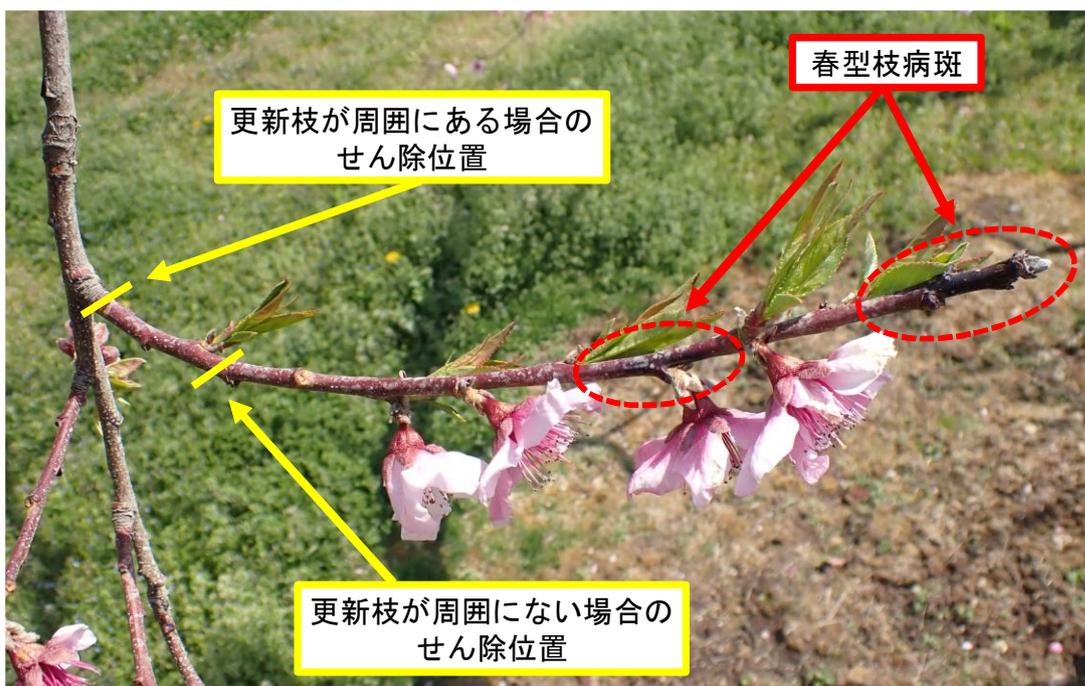


図4 春型枝病斑のせん除位置（写真提供：農業総合センター果樹研究所）

●本情報の内容に関する質問は、福島県農業総合センター安全農業推進部発生予察課（病害虫防除所）まで御連絡ください。

TEL 024-958-1709 FAX 024-958-1727

モモのカイガラムシ類の防除対策

令和 7 年 4 月 30 日
福島県病害虫防除所

ウメシロカイガラムシの防除適期が平年より早まる予測ですので、タイミングを逃さないよう防除を徹底しましょう。また、ナシマルカイガラムシの寄生状況にも注意しましょう。

1 モモを加害する2種のシロカイガラムシ類について

モモを加害するクワシロカイガラムシとウメシロカイガラムシの雌成虫は、枝幹等に寄生して越冬します。防除効果が高い時期は、カイガラに覆われていない1齢幼虫期(ふ化定着初期)です。

2 防除適期の予測

アメダスの各地点の日平均気温により、ウメシロカイガラムシ第1世代幼虫の防除適期(ふ化盛期)を予測した結果、今後の気温が2℃高く推移した場合、3地点とも平年より2週間~10日程度早まる予測です(表、4月30日現在)。また、果樹研究所における第1世代幼虫のふ化盛期は、今後の気温が2℃高く推移した場合、5月8日頃と予測されています(4月30日現在)。

表 ウメシロカイガラムシの第1世代幼虫発生盛期予測日(4/30現在)

	梁川	郡山	会津若松
本年予測	5月8日	5月11日	5月13日
平年	5月22日	5月24日	5月24日
平年差	-14	-13	-11

※本年予測日は平年より2℃高く推移した場合。起算日:1月1日(演算方法は平均法)□

3 防除対策

クワシロカイガラムシの防除適期は、ウメシロカイガラムシより5日~10日程度遅くなりますが、令和5年度「参考となる成果」により、両種を同時防除できる殺虫剤が明らかとなりました。本成果に基づき、アプロードフロアブル 1,000倍、モベントフロアブル 2,000倍、トランスフォームフロアブル 2,000倍のいずれかを上述のウメシロカイガラムシ第1世代幼虫の防除適期に散布しましょう(<http://www.pref.fukushima.lg.jp/uploaded/attachment/624632.pdf>)。

4 第2世代以降の発生について

昨年のウメシロカイガラムシの歩行幼虫の発生回数は、春期や秋期の高温により、従来より多い年3回でした(図1)。4月22日付け3か月予報によると、5~7月の平均気温が高い確率は60%であり、本年も第3世代が発生する恐れがあるため、第1世代の防除の徹底が重要です。

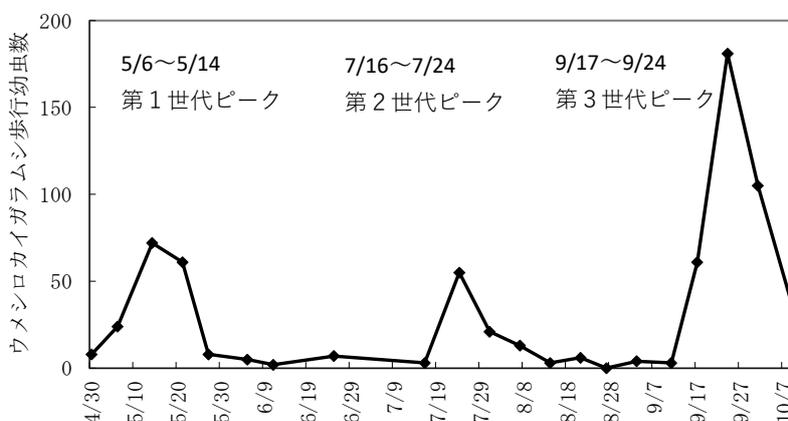


図1 ウメにおけるウメシロカイガラムシ歩行幼虫の発消長 (郡山市)

5 ナシマルカイガラムシの発生について

昨年、県北地方の複数のモモほ場において、ナシマルカイガラムシの寄生が確認されましたが、本年も複数のモモほ場での寄生が確認されています。

本種は、枝幹部に寄生し樹液を吸汁するので、樹勢が衰え結果枝や芽の枯死が発生し、シロカイガラムシ類と同様に果実にも被害を及ぼします。山梨県では、2004年～2005年にかけて、モモでのナシマルカイガラムシの発生面積の拡大が問題となったと報告されており、本県でも今後のモモでの発生拡大が懸念されます。

ナシマルカイガラムシの介殻は黒色～灰白色をしており、発生を見逃しやすいため、発生状況をよく確認しましょう（図2～4）。シロカイガラムシ類の介殻は白色であり（図5）、両者を区別するポイントです。特に、リンゴやナシの隣接園では注意が必要です。



図2 ナシマルカイガラムシの骨格枝への寄生状況



図3 ナシマルカイガラムシの結果枝への寄生状況

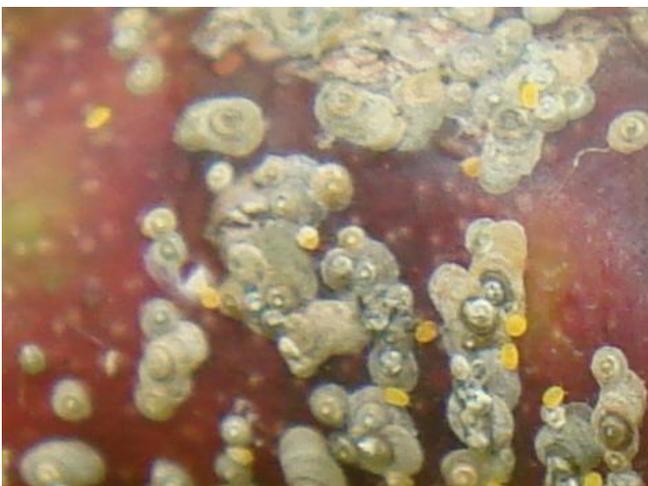


図4 ナシマルカイガラムシの雌成虫の介殻（灰白色）とふ化幼虫

※図2～4は県植物防疫協会提供。



図5 シロカイガラムシ類(白色)の寄生状況

● 情報内容への質問は、最寄りの農林事務所または福島県農業総合センター安全農業推進部発生予察課（病害虫防除所）まで御連絡ください。本情報は、病害虫防除所ホームページ (<https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/37200b/>) でもご覧になれます。TEL 024-958-1709